

韓日米の美術史を繋ぐ金秉騏画伯

渥美国際交流財団関口グローバル研究会 (SGRA) 主催

2022 年 10 月 29 日 (土) 11:00~12:30

日本語・韓国語 2 言語 (同時通訳で開催)

オンライン (Zoom) 開催・参加無料

1916 年に平壤に生まれた金秉騏 (キム・ビョンギ) は 1930 年代に学生として東京で過ごし、1947 年以降はソウルで教育者・評論家として活躍、1965 年にアメリカに渡りました。晩年は韓国に戻り、今年 2022 年 3 月 1 日に 105 歳で亡くなるまで具象と抽象をさまよう魅力的な絵を描き続けました。韓国ではオーラルヒストリー・インタビューを多く受けて、韓国美術史における時代の重要な証人と見なされています。

金秉騏の長いキャリアを通してアートの世界的な動きをさかのぼることができる一方、どの国の美術史にも簡単には収まりきれない様々な活動の軌跡を見ることができます。この企画では金秉騏画伯の韓国・日本・アメリカ美術史における立ち位置を示し、それらの美術史上の接点、空白、そして限界について語り合い議論していきます。

プログラム

11:00 挨拶、カフェの趣旨、発表者の紹介

ヤン・ユー グロリア 九州大学人文科学研究院広人文学コース講師

11:05 問題提起：金秉騏の人生と画業

コウオジェイ、マグダレナ 東洋英和女学院大学国際社会学部国際コミュニケーション学科講師

2016 年 10 月に東京で開かれていた小さな個展で初めて金秉騏画伯と出会った。それ以来、2019 年 12 月まで数回にわたりオーラルヒストリー・インタビューを行った。本発表では、前半に最初の出会いを振り返り、その後の調査と先行研究に基づき、朝鮮半島・日本・アメリカで活躍した画伯の人生と芸術を紹介する。後半では、私たちのアイデンティティと深く結びついている「国史としての美術史」の特徴と、一方で、国家の枠組みで近現代美術史を語る困難について考察する。韓日米それぞれの美術史における画伯の立場についての私の分析をスタートとし、討論者に問いを投げかける。本カフェが従来の美術研究の偏りや見落としとしていたことに目を向け、研究者の対話の場となることを期待する。

11:35 討論：金秉騏、「間 (in-between)」の実現

朴慧聖 韓国国立現代美術館学芸員

ダイナミックに展開された 20 世紀の韓国美術史の重要な現場には常に、金秉騏という存在 がいた。韓国近代美術の巨匠たちの留学時代 (1930 年代) や、韓国と北朝鮮に分かれたことで半々の美術史となり、越北などで存在感が薄れてしまった作家たち、そして独立以後の韓国戦争 に至る混乱した時期に登場した無数の美

術団体や事件、人物の関係などが、金秉騏によって生々しく証言された。また、韓国現代美術が本格的に形成された 1950～60 年代、すなわち美術制度が構築され、「模倣」や「必然」などの議論が激突し、韓国現代美術がパリ・ビエンナーレなどの同時代における西欧美術現場に進出する時代においても、彼の口述は後輩研究者たちにとって重要な手がかりを提供した。彼は具象と抽象の間、伝統と前衛の間、世代間、南北の対立する理念の間、韓国（平壤／ソウル）－日本－アメリカといった、さまざまな境界に位置し、鋭い知性と感覚で 100 年を超える人生を生き抜いた。「間」の実践は、彼の絵画にも見られる。2014 年韓国国立現代美術館で開催された回顧展以来、時代の日撃者としてではなく、画家金秉騏の芸術世界そのものが注目を浴びている。

11：45 討論：1930 年代前半の東京におけるモダニズムの転換

五十殿利治 筑波大学名誉教授

本発表で注目するのは、金秉騏が学んだアヴァン・ガルド洋画研究所／駿河台洋画研究所の位置づけである。この研究所は 20 年代的なモダニズムから 30 年代的なモダニズムへの転換を明示する側面があった。研究所の指導者峰岸義一は「巴里・東京新興美術展」を 1932 年末に実現したのだが、仏文タイトルでは「アヴァンギャルド」を謳っていたのは象徴的である。瀧口修造の卓抜な評言（1938）によれば「衝突的」なものから「浸透的」なものへの転換である。それは、津田正周の純粹美術研究所と同様、美術学校とは異なる師弟関係というリレーを、また運動としては SPA 集団から自由美術家協会や九室会への展開を生み出したといえる。

11：55 討論：米国におけるアジア系アメリカ人美術史の歴史と課題

山村みどり ニューヨーク市立大学キングスボロー校准教授

米国におけるアジア系アメリカ人アーティストに関する美術史に関する研究は、1994 年にニューヨーク、アジア・ソサエティーで開催された「Asia/America: Identities in Contemporary Asian American Art」が初の歴史的展覧会で、2012 年にニューヨーク大学のアジア太平洋アメリカ機関（Asian/Pacific/American Institute）のアレックス・チャンとコネチカット大学の教授のマーゴ・マチダが中心となって企画した全米人文科学基金夏期セミナー「Re-envisioning American Art History: Asian American Art, Research, and Teaching」が初の国家レベルでの分野立ち上の試みという、比較的新しい分野である。このトークでは、米国におけるアジア系アメリカ人美術史の歴史を簡単に説明し、抽象美術と具象美術の異なる特徴や、移民 1 世と 2 世以降の作家の違い。また、個人的な研究テーマである、日本から移住した女性アーティスト、草間彌生や小野洋子作品研究における難題などについて言及する。

12：05 座談会と質疑応答

12：25 まとめの言葉、締め挨拶

※同時通訳：朴ヘリ（韓国外国語大学）、安ヨンヒ（韓国外国語大学）

右記リンクまたはQRコードからお申込みください <https://onl.bz/c1Mn3Zb>



<お問合せ先>SGRA 事務局 sgra@aisf.or.jp

フォーラム中の技術トラブルはZoomのチャット機能でご連絡ください



討論：朴 慧聖 (Park Hyesung)

高麗大学で英語英文学、ソウル大学で美術理論と美術経営の修士号と博士号取得。ソウル大学などで東西洋の近代美術史を講義。ソウル大学美術館を経て現在国立現代美術館で勤務。金秉騏、邊月龍、Giorgio Morandi、韓国のモダンガール、徳壽宮プロジェクトなどの展覧会を企画。



討論：五十殿 利治 (Omuka Toshiharu)

日本の美術史学者、筑波大学名誉教授。研究分野は、近代美術史。とりわけロシア・アヴァンギャルド、大正期新興美術運動が専門。主な著書に『大正期新興美術運動の研究』（スカイデア出版・毎日出版文化賞奨励賞受賞、2006年）、『観衆の成立——美術展・美術雑誌・美術史』（東京大学出版会、2008年）、『非常時のモダニズム』（東京大学出版会・芸術選奨文部科学大臣賞受賞、2017年）など。編著『「帝国」と美術 一九三〇年代日本の美術戦略』（国書出版会、2010年）など。



討論：山村 みどり (Yamamura Midori)

ニューヨーク市立大学キングスボロー校准教授、ニューヨーク市立大学大学院センター特別教授。スミソニアン・アメリカ美術館博士課程研究員、メロン財団特別研究員などを経て、2012年ニューヨーク市立大学大学院センターで美術史博士号取得。2004年から2020年までニューヨーク近代美術館講師。2014年から2016年までフォーダム大学講師、ニューヨーク市立大学ハンター校非常勤講師などを経て現職に就く。主な著書にテート・モダン／ホイットニー美術館の『草間彌生』（2012年）、『Yayoi Kusama: Inventing the Singular』（MIT Press, 2015年）、共編に『Visual Representations of the Cold War: Postcolonial Struggles in East and Southeast Asia』（Routledge, 2021年）など。



司会：ヤン・ユー グロリア (Yang Yu Gloria)

2015年度渥美奨学生。2006年北京大学毕业。2018年コロンビア大学美術史博士号取得。東京大学東洋文化研究所訪問研究員を経て、九州大学人文科学研究院広人文学コース講師。近現代日本建築史・美術史を専門。



問題提起：コウオジェイ マグダレナ (Kolodziej Magdalena)

2017年度渥美奨学生。2018年デューク大学 Art, Art History & Visual Studies 学科で博士号取得。デューク大学でポスドクを経て、2019年から東洋英和女学院大学で講師。研究分野は、東アジアの近代美術史。近著に「Studying Art in Colonial Libraries」*など。

*<https://scalar.chass.ncsu.edu/bodies-and-structures-2/art-in-colonial-libraries-landing-page>